

第十節 古代の人々に負うもの

ニーチェの言う「古代の人々(die Alten)」とは言うまでもなく、古代ギリシャおよびローマの人々のことである。彼がプフォルタ学院で受けた古典教育、そして文献学者としての彼の出発、その成果としての『悲劇の誕生』、いずれもこの「古代の人々」に負うものが大きい。ここでは、その「古代の人々」に対する肯定および否定も含め、最終的には「悲劇」の意味を巡って改めて「ディオニュソス」について触れられている。

(1) 高貴なローマ的文体（「私が古代の人々に負うもの」の1）

ここではニーチェは最後に「古代世界」について述べている。「古代世界」についてすべてを肯定するつもりはない。これはあらゆる文化に当てはまり、書物にも、さらには場所や風景にも当てはまることであるが、「然りを言う」より、むしろ「否を言う」方が好ましく、最も好ましいのは「何も言わないこと」である。結局、取り上げることができるのは、ごく少数の古代の書物であり、しかもそこには最も有名なものは含まれていない。ⁱ

それから、次にここで彼は「文体に対する感覚(ein Sinn für Stil)」について述べている。特に「文体としての格言(das Epigramm als Stil)」に対する彼の「感覚」は、ほとんど瞬間的にサルスティウス(Sallust; BC.86-35)に触れた時に目覚めた。その時、彼は一気に出来上がった。「圧縮され、峻厳で、できる限り多くの実質を根底にもち」、「美しい言葉」や「美しい感情」に対する「冷ややかな悪意」を抱く、ここに彼は自分を探し当てた。そして、彼の『ツァラトゥストラ』のなかにも「ローマ的文体」への「極めて真摯な野心」が見出されるであろうと述べている。ⁱⁱ

彼がホラティウスに初めて触れた場合も同じであった。ホラティウスの頌歌が与えてくれたものと同じ「芸術的興奮」を今日までどの詩人にももったことはない。その「しるしの範囲と数(Umfang und Zahl der Zeichen)」は「最小限」でありながら、それによって達成された「しるしのエネルギー」は「最大限」である。これら一切が「ローマ的」であり、「勝れて高貴」である。そして、ニーチェはこれ以外の詩はすべて「通俗的」であり、「単なる感情の饒舌」であると言い切っている。ⁱⁱⁱ

(2) プラトンとトゥキディデス（「私が古代の人々に負うもの」の2）

ところで、ギリシャ人はローマ人と同じ意味をもちえない。ギリシャ人から何かを学ぶということはない。特にプラトンに関してニーチェは「徹底的懐疑家」であり、「芸術家プラトンの賞讃」に同意することはできないと言う。プラトンは「文体のあらゆる形式」を混同しており、「文体の最初のデカダン(ein erster décadent des Stils)」である。プラトンは退屈であり、心底信頼することはできない。彼は「古代ギリシャのあらゆる根本衝動」から逸れ、「極めて道徳化され」、「極めて先在キリスト教的(so präexistent-christlich)」である。彼はすでに「至高の概念としての『善』」をもち、プラトンと言う現象全体が「高等詐欺(höherer Schwindel)」である。今なお「教会」という概念のなかに、つまり「教会の構造、体系、実

践」のなかに多くのプラトンがある。^{iv}

このようなプラトン主義からの「休養」や「治療」となったのがトゥキディデスである。彼は「実在性(die Realität)」への関係において、ニーチェと「最も血縁に近い(am meisten verwandt)」。つまり、彼は、自分を誤魔化さず、「実在性への勇気」をもつものとして、「ギリシャ人を理想化する憐れむべき綺麗ごと」から「徹底的に治療する」。これに比してプラトンは「実在性への臆病者」であり、「理想」へと逃げ込むのである。^v

(3) ギリシャ人における力への意志（「私が古代の人々に負うもの」の3）

ギリシャ人のうちにはその「最も強い本能」としての「力への意志」がある。彼らは、この「衝動の制御しがたい暴力」の前で打ち震え、かれらの内部にあるその「爆発物」から互いに身を守るための「諸制度」を作った。しかし、その内部にある「巨大な緊張」が高まり、遂には爆発した。彼らは「強くあること」が必要であり、「危険」は直ぐ近くにあった。そのため、また彼らの「すばらしく柔軟な肉体」や「大胆な現実主義」や「反道徳主義」が必要であった。彼らは自分が「上位」にあると感じ、それを誇示した。それは「自分自身を讚美し」、場合によっては「自分を恐怖させる」手段にほかならなかった。^{vi}

このようなギリシャ人を評価するために、ソクラテス諸学派のごとき「俗物者たち(die Biedermännerei)」を取り上げるのはお門違いである。彼らは「ギリシャ精神のデカダン」であり、「古代の趣味や高貴な趣味に逆らう反対運動」である。彼らは「競技本能」に逆らい、「ポリス」に逆らい、「種族の価値」に逆らい、「伝承の権威」に逆らっている。^{vii}

ⁱ Ibid., Was ich den Alten verdanke. 1, S.154

ⁱⁱ Ibid.

ⁱⁱⁱ Ibid., S.154-155

^{iv} Ibid., Was ich den Alten verdanke. 2, S.155-156

^v Ibid., S.156

^{vi} Ibid., Was ich den Alten verdanke. 3, S.157

^{vii} Ibid.